

---

# 動物使役師高等学校。

紫苑 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

動物使役師高等学校。

### 【Nコード】

N6380Z

### 【作者名】

紫苑 優

### 【あらすじ】

今から二十年前、西暦二〇一五年。動物が人間とコミュニケーションをとることができると分かった。それを利用しようと考えられた学校、国立動物使役師高等学校。新しくそこに入ったある姉妹が学校で騒動を起こす物語。（これはのんびり更新です。ご了承ください。）

## 「0」（前書き）

真面目に書いてみました、というか、思ったままに書きました。  
誤字、脱字があったりしても無視してください。

楽しく読むことは大切。

動物の使役。

それを考え出したのは、一体誰だったのか。

今から二十年前、西暦二〇一五年。

人間が愛玩動物として飼っていたもの、いわゆるペット。

それらが人間の言葉を話せる、ということが分かった。

昔からいわれる「年老いた猫は人の言葉を話す」というのも正しかった、と言うわけだ。

発見のきっかけは、情けないことに、”ある教授がペットに愚痴を聞いてもらっていたところ、うるさい、と怒られたため”だ。決して研究の成果などではない。

もし他の人間が自分のペットが話せると知っていても、単なる自慢話で終わってしまったことだろう。

だが、その人間は何度もいうように”教授”なのである。こんな凄いことを放っておくわけにはいかない。

実験に実験を重ね、やがて全ての生き物が人間とコミュニケーションをとれると分かった。当然の如くそれを活用しよう、と考え始める人間がでてくる。

そして提案されたのが「動物の使役」だ。

しかし、それは困難を極めた。

動物を好きだと、いうことと、使役することが出来る、ということとは違う。

生憎なことに、ほとんどの人間が体質に合わなかったりした。

しかし研究者たちはあきらめなかった。

職種、性別、年齢。条件を細かく設定し、試した。

その結果、分かったことがある。

動物を使役できるのは、数少ない超能力者、不可思議な能力を持つ者たちであること。

適正などもあったが、充分なくらいには彼らは自由に動物を扱えた。

その発見だけで終わっていれば良かったものを。

研究者たちは、強欲にもその先を求めた。

人工的に超能力者を作り出すことは可能なのだろうか、と。

結論からいうと、それは今になっても出来ていない。

動物を自由に扱うのは、限られた者たちだけだった。

彼らは「使役師」という職業で呼ばれ、様々な職で活躍した。

それを育てるために建った学校が、国立動物使役師高等学校。

勿論、この学校に入る人間は少数である。

しかし、向き・不向きというものがあつた。

うまく扱えるか、感情に左右されないか。

それが出来ない者は、周りから白い目で見られ、やがて此処を去っていく。

嫌に思えるほど実力主義である。

しかし、”平等”などという言葉は、この学校の中では少なくとも通用しない、というのは確かだ。

「0」(後書き)

読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

## 「1」(前書き)

設定を作るのが大変でした。

楽しく読んでくれると嬉しいな。

「1」

「姉様、行きましょう」

「……あ。行くか」

四月、春。

国立動物使役師高等学校の入学式の始まる一時間前。

二人の女子生徒が、門をくぐった。

一時間前というこんな早い時間から来る新入生もそうはいない。

学校は、まだ静かだ。

もしいたとしても、それは少ない在校生たちである。

静かに話しながら歩く彼らの片方が、「姉様」ということから、

もう片方が姉であり、姉妹である、ということが分かるだろう。

しかし、

彼らほど似ていない姉妹も珍しい。

「姉様」と呼ばれた女子生徒は、黄色がかった茶髪（彼女のそれは地毛である）に、黒の鋭い目をしていた。無表情な顔が崩れるところは、少なくともまだ見られていない。

そんな無愛想な姉に対して、妹と思われる女子生徒は、愛らしい顔立ちをしていた。

艶やかな黒髪に、同色の目、肌は白く、見らずにはいられない。

それを見た全員が、美人だ、と言いそうな風貌だった。

二人が中に入ると、建物が三つ建っているのが見えた。

「地図にも書いてあったが、これほどはっきりと区別する所も珍しい」

いや、区別でなく、差別か、と無表情に呟く姉を妹はそっと見た。この学校には、学校の中に学校が三つあるという特殊なつくりをしている。

一つ目は、肉食系の動物使役師を目指す者のための場、使役？科。

二つ目は、草食系の動物使役師を目指す者のための場、使役？科。そして三つ目は、単に超能力者としての能力を磨く者のための場、魔法科。超能力は、人々には魔法と認識されている。がある。入学するこの姉妹は、妹が使役？科、姉が魔法科に入ることになっている。

なので、制服も多少ではあるが、異なっていた。

妹の方は、校章の色が淡い桃色であるのに対し、姉の方は、黒である。

「相容れないように離しておこう、と考えているのか。成る程」

「姉様……そんな自虐的なことを言っではいけません」

「分かっている。だが私は決して優等生などではないからな。見てみる、紫。在校生たちはもう私の存在を疎ましく思い始めているぞ」  
「なっ……」

「黒の校章もそれなりに目立つものだな」

いつの間にか突き刺さり始めている悪意のこもった視線を気にもせず、姉は妹に言う。

「しかし、お前は気にしなくてもいい。悪意を受けているのは、私だからな」

心配そうな妹に本心がばれないように背を向け、建物を見学してくる、と姉は三つの建物のうちの一つに歩み寄った。

それを彼女の妹が不安げな眼差しで見ていることには、気づいていない。

\*\*\*

魔法科の図書館。そこに彼女はいた。

適当に本をとり、机の上に置く。

そして、本の表紙に手を置き、目を閉じる。

このやり方は彼女が本を読むときに使用するやり方である。

無駄にあるであろう魔法を使い、脳内に直接本の内容を認識させ

るというものである。

脳にたくさん情報を送り込むため、彼女の妹はこのやり方を好まないが、これで得た情報は、なかなか忘れないので彼女は重宝していた。

十分ほど時間をかけて内容を理解すると、（因みに本の題名は、”魔法の重要性”という本である）彼女はゆっくりと目をあけた。何故なら、

「へえ、すごいやり方で読書してるね」

先程から現れたと思われる人物に、応対するためである。彼女は先程からこちらを観察する気配を感じていた。

「これが私のやり方ですが、何か」

何の感情も感じさせず言う言葉に、その人物は苦笑した。

「いや、一年目から魔法科に入るっていう珍しい生徒を見にきたんだ。……ふうん、君が」

「初めに自分の名を名乗るのが礼儀だと思えますが」  
思わぬ指摘に驚いたその人物は、それもそうだと賛成すると、名乗る。

「ああ、ごめん。僕は成田要というんだ。この学校の生徒会副会長だね」

「……私は、九条紅といいます」

「知ってるよ。魔法が出来るけど、使役が出来ない少し残念な生徒、だろう？」

即答される挑発的な言葉にも、紅は何の反応も見せない。ただ、冷静に相手を観察している。

「そして、何でも出来る妹を持ってしまった出来損ないの姉。君がどんな風にここで学校生活を送るか、楽しみだな。退学しないことを祈るよ」

結局、成田という人間は挑発しただけで満足して帰っていった。何がしたかったのか、と紅は疑問に思う。あれくらいの悪意は、序の口であると彼女は分かっているのだ。

時計を見ると、入学式が始まる二十分前だった。

他の生徒も、もう来ているだろう。

人間は集団で動きたがる生き物だということを、紅は充分に理解している。

「さて、行くか」

彼女は会場に向かって足を向けた。

「1」（後書き）

・・・はい。この物語は、きっとシリアスです。

楽しく読めるのか？これ・・・

因みに、この姉妹の名前の読み、姉は”べに”で妹は”ゆかり”です。

アドバイス、感想等等お待ちしております。

これを読んでくださったあなたに感謝の言葉を。

「2」(前書き)

まあ………できるだけ楽しく！読んでください。

「2」

幾多の椅子が並ぶ体育館（中に建物が三つあっても、体育館は何故か一つしかないのだ）に入ると、そこは大分新入生で埋まっていた。

「……………ふむ、思ったよりも席が埋まっているな」

因みに、席順は自由である。にもかかわらず、？科と？科がきれいに分かれているのは、果たして気のせいなのか。

どちらにしても、魔法科の生徒である紅には関係の無いことである。ので、端の方の席に座ることにした。

妹、紫の姿はまだ見ていない。新入生代表になってしまったから、その準備でもしているのだろう。よくは知らないが、最近の妹忙しそうに動き回っていた。

（あの妹は本当によく出来ているからな）

紅が自嘲気味にそう思っていると、すぐ横で声があがった。

「あのお……………、すみません？」

半ば疑問系に放たれたその言葉が自分に向けられたものと、気づかなかつた紅は、少し驚いた。

「隣、よろしいでしょうか？」

「……………ああ、構わんが」

「あ、ありがとうございますっ！」

かなり緊張していたらしい。その少女は、嬉しそうに紅の隣に座った。

紅はこっそり隣の少女の校章を盗み見る。

彼女の校章は、妹と同じ淡い桃色だった。

「？科の生徒ですか……………名前を聞いても？」

尋ねると、少女はもつと緊張したようで、声を上ずらせた。

「あ、わたしは西園寺奏美さいおんじかなみといいます！え、えっと、あなたの名前を教えてください！」

「そんなに緊張しなくても……。私は九条紅といいます。魔法科に入った一年生です」

「えっ？」

少女　奏美は驚いたように紅の校章を見た。

彼女の校章は、存在を消されたように、塗りつぶされたように、黒い。

何も言えない奏美に、紅は苦笑した。

（やはり。いつもの反応だ）

「私は魔法は扱えるのですが、どうも使役は出来なくて。仕方の無いことです」

「そうなんですか……」

一瞬にして同情に変わる視線。

（案外棘のある視線よりも、こちらの方が痛いものだ）

使役が出来ない魔法師は何故差別されるのか。

紅はそれに問題があるのではないか、と思わずにはいられない。

\*\*\*

そんなことがあった時、ステージの裏では、紫が現生徒会の面々と共に準備を行っていた。

「……ふっ」

ひとしきり終わった後、現生徒会会長、千崎千夏せんさきちなつが「お疲れさま」と紫を労っていると、一人の人間がふらりと姿を現した。

「成田！遅いわ。もう終わったのよ。九条さんがやってくれたんだから」

「ごめんってちーさん。ちょっと急用でね」

「ちーさん”はやめて……」

一気に脱力した千夏を見て成田は少し笑うと、紫の方を意味ありげに見ながら言った。

「そうそう。それと、魔法科の生徒も見てきたんだ」

「！」

驚く紫に、成田は笑う。

「似ていない姉妹だね、君たちは。……お姉さんの方は日頃言われなれていることもあってか、芯が強い」

「成田！」

苛めるような雰囲気になってしまつのを、千夏が止める。

「新人生をあまりからかつてはいけない」

「分かっていますよ。会長」

心を通つような言葉に、紫は姉 紅に対して、申し訳ないような、悲しいような複雑な気持ちになった。

しかし、ここで不安な顔を見せるのは相手に弱みを見せることだ。

紫は頑張つて気にしないふりをしていた。

(わたしが弱みを見せていいのは、姉様ただ一人なのだから)

## 「2」(後書き)

何となく健気ゆかりです。紫ゆかりが。

アドバイス・感想等お願いいたします。

読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6380z/>

---

動物使役師高等学校。

2012年1月6日10時45分発行